



： 卷頭言 ：

甦れ “白砂青松 100 選”

(公財)日本植物調節剤研究協会 九州支部長 今林惣一郎

地元海岸の“白砂青松”の維持・保全、退化しつつある海岸松林の再生を目指したボランティア活動「奈多植林会」に参加して、はや10年が経過した。日頃、仕事にかまけて地域の活動にあまり参加してこなかったのも、せめてもの罪ほろぼしとして作業があるときは、可能な限りこの活動には積極的に参加してきた。

当地域は、福岡県福岡市東区にあり、通称「海の中道」と呼ばれ、志賀島と九州本土とを繋ぐ陸繋砂州の東部に位置しており、北は玄界灘、南は博多湾の風光明媚なところにある。「海の中道」は現在、福岡市内のリゾート地域として多くの娯楽施設があり、また、年間を通じいろいろなイベント等も開催され市民の憩いの場として賑わっている。地域の防風林は、江戸時代、黒田藩のころから多くの人々により、クロマツの植林が行われ、嚴重な国の管理・保護のもと現在まで維持されてきており、現在地域住民の多くの方々に親しまれ、日本の“白砂青松100選”にも選ばれている。ところが、この100年～150年のクロマツの大木がここ1～2年の間に、あっという間に、“松くい虫”被害（マツ材線虫病）により、次々と伐倒されている。

地元の防風保安林はほとんどが国有林であるため国の管理・保護が基本であるが、この10年間ボランティア活動として、松林の整備を一緒にお手伝いしてきた者として、非常に残念で、また何とも例えようもない無念さが残る。

通称“松くい虫”による被害は、その病原がマツノザイセンチュウ（北米原産の外来種）、その媒介者はマツノマダラカミキリで、松の伝染病と言われており、記録に残されている被害では、古くは1905年に長崎市周辺で集団枯死が発

生し、以後、九州・山陽地域に被害が広がり、戦後、国、地方自治体の強力な伐倒駆除により一時被害は沈静化されたが、その後、1965年代後半からマツを巡る社会環境の変化により、防除の努力にもかかわらず“松枯れ”被害が全国的に拡大していったと報告されている。当地域では、幸いなことに大きな被害は免れてきたが、2010年夏の猛暑をきっかけに、被害が一気に拡大し、2011年度約1万本以上、前年の約3倍となり被害が急増している。このまま放置しておく、地元海岸の白砂青松はもとより、防風防砂の保安林としての機能も失われてゆくのではないかと非常に心配している。すでに、今年に入り住宅や樹木・植物等にも被害が徐々に始めている。このような状況の中で、国や地方自治体では、本年枯死した被害木の伐倒・駆除、樹幹注入、薬剤散布等の徹底、また地元のボランティア活動では「植林会」が中心となり地域住民参加のもと、願いを込めてスーパークロマツ数千本を植林した。植林したマツが防風保安林としての機能を果たすためには、30年以上の長い年月がかかると言われているが、何とか、もとの白砂青松の松林えと生き返らせたいと思っている。

今後の取り組みとして、当面は国、地方自治体による被害木の伐倒・駆除、薬剤散布の徹底、クロマツ抵抗性品種の早期育成、また地元のボランティア活動としては地域住民の方々と一体となり①海岸の清掃活動②マツ林の清掃・整備の支援③マツの植林を一步、一步積み重ねていくことが重要であるが、一方では今年の被害対策により少しでも“松枯れ”が治まってくれることを願っている。